

パプアニューギニア、トーライ人の貝殻貨幣

深田淳太郎（三重大学）

パプアニューギニア、イーストニューブリテン州の州都ラバウル近郊に住むトーライ人（Tolai）は、タブ（tabu）と呼ばれる貝殻貨幣を用いてきた。タブはムシロガイ（*nassa camelus*）という直径 1 cm、高さ 8mm 程度の巻貝に穴を穿ち、籐の紐でつなげて数珠状に加工したものである。トーライ人はこの貝殻貨幣タブを、結納金や土地使用権などの諸権利への支払いや、葬式や成人儀礼などの人生儀礼における顕示といったいわゆる慣習的な用途にだけでなく、今日に至るまで、日常的なモノの売買にも広く用いてきた。また近年では、イーストニューブリテン州政府が税金や学校の授業料などの支払いにおいてもタブの使用を公認し、さらにはパプアニューギニアの法定通貨であるキナを補完する通貨（complementary currency）として貝殻タブを活用しようという計画も打ち出されている。

パプアニューギニアを含むメラネシアは、貝殻や動物の歯、石、鳥の羽など様々な土着の貨幣が使用されてきた地域であるが、19 世紀の西洋世界との接触以降、その多くは「お金」としての地位を西洋の法定通貨に奪われており、トーライ人のタブのような事例は稀である。ただし、しばしば誤解されることであるが、トーライ人の貝殻貨幣が現在まで使われ続けているのは、彼らがグローバルな市場経済から隔絶された生活を営んでいるからではない。むしろ逆で、彼らが暮らすラバウル近郊はパプアニューギニアの中でも最も早くヨーロッパ人と接触した地域であり、ラバウルは植民地下における経済的・政治的な中心地であった。すなわち最も長く市場経済と西洋近代の法定通貨に馴染んだ人々が、最も強く土着の貨幣を保ち続けているということである。

本発表では、19 世紀後半にドイツの植民地下に入ったトーライ人が外来の貨幣の導入をどのように経験したのか、また外来の貨幣と自分たちの貝殻貨幣との関係をどのように形作っていったのかについて接触初期の宣教師や商人、植民地行政官や人類学者などの記述をもとに見ていく。プランテーション開発や人頭税の賦課、金属器や帆船などの新たな技術の導入、キリスト教の布教など、特に 20 世紀前半までの接触後の比較的初期の状況を見ていくことを通して、なぜ、いかにしてトーライ人の貝殻貨幣が現在まで「お金」として強い力を持ち続けているのかについて考察したい。